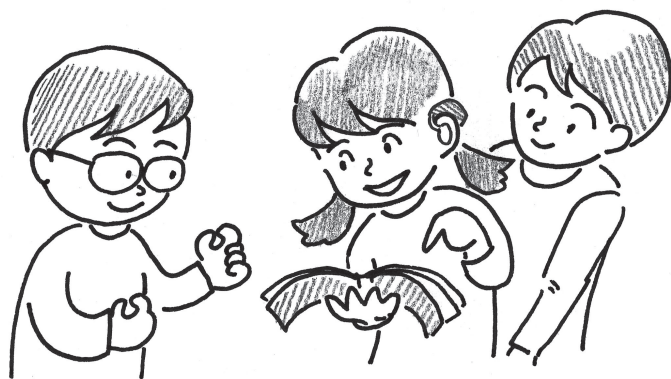


軽度・中等度難聴児の指導・支援のために

ー軽度・中等度難聴児をはじめて担当される先生へー



独立行政法人国立特別支援教育総合研究所

平成24年3月

1. この冊子をお読みくださる方へ

この本は国立特別支援教育総合研究所の研究（注）をもとにつくられたものです。具体的には聾学校（聴覚特別支援学校）や小・中学校の難聴特別支援学級・通級指導教室（難聴）の先生方へのアンケートの結果と、難聴児の教育に長年携わった研究協力者の先生のアドバイスに基づいて作られています。

この本では「軽度・中等度難聴児」ということばを、少し広く考えています。聴力で言いますとおよそ 80dB 以下の子どもを指しますが、厳密な意味ではなく、補聴器を付けてきこえるけれども、ことばの内容を理解したり、大勢の人の中で音をきいたりする場合などに不便を感じる子どもたち全体を指しています。また、人工内耳装用児や一側性難聴児（片耳だけがきこえない）なども、同じようなきこえにくさを持つ子どもとして「軽度・中等度難聴児」に広く含めています。

この本で最も伝えたいことは以下のことです。

- ・軽度・中等度難聴児はきこえていても、いつも同じようにはっきりときこえているのではなく、きこえ方が不安定であること。
- ・きこえることと、その内容や意味が分かることは同じではないこと。
- ・きこえる工夫と、分かる工夫の両方が大切であること。
- ・きこえにくい子どもたちの「ふるまい」だけでなく、「心の様子」にも配慮してほしいこと。
- ・軽度・中等度難聴児のきこえやコミュニケーションについて本人や周りの人が知ることがとても大切であること。
- ・軽度・中等度難聴児の指導や支援を考えると、参考になる資料や情報を提供してくれる機関があること。

この冊子をお読みいただくことで、以上のことを少しでも理解していただき、軽度・中等度難聴の子どもたちによりよい指導・支援ができることをねがっています。

注 国立特別支援教育総合研究所平成 22 年度～ 23 年度専門研究 B「軽度・中等度難聴児に対する指導と支援のあり方に関する研究」（研究代表者：原田公人）

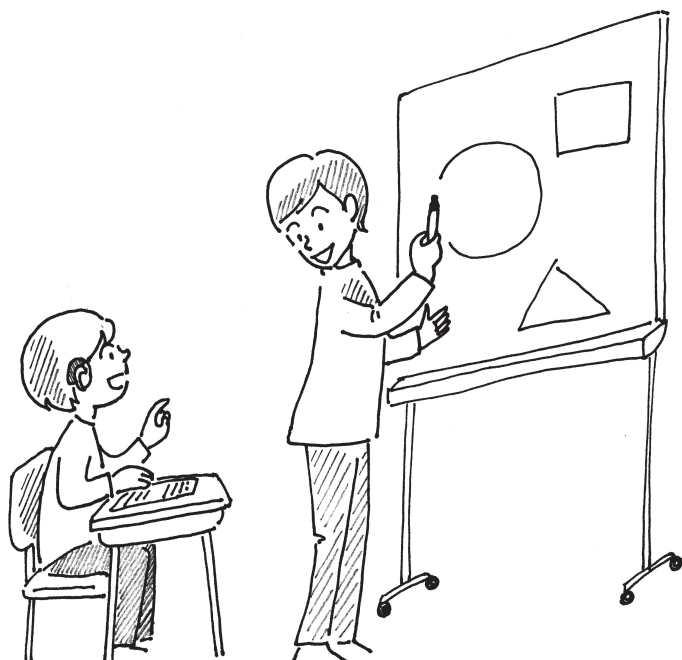
2. この冊子の使い方

この冊子は軽度・中等度難聴児をはじめ担任された先生が子どもと接するに当たって知っておくべき内容や、子どもさんの成長の時々で新しい戸惑いをもつ保護者の方々へアドバイスする内容のうち基本的なことを解説しています。ですからあくまでも、指導や支援を行う際の目安を示したものとお考えください。一人一人のお子さんにぴったりと合った指導・支援についてはお近くの専門家と相談して進めるようにしてください。

またこの本に書かれている事柄の背景や、より詳しい解説を知りたい場合には研究報告書をご覧ください。

この冊子は「解説」、「Q&A」、「関連情報」の三つからなっています。

「解説」では「軽度・中等度難聴」や「難聴児の教育」について述べています。「Q&A」ではきこえにくいお子さんをはじめ担当される先生に、指導や支援の際に配慮していただきたいことをとりあげました。「関連情報」では困ったときに相談にのってくれる機関や、知りたいことが書いてある資料などを紹介しました。

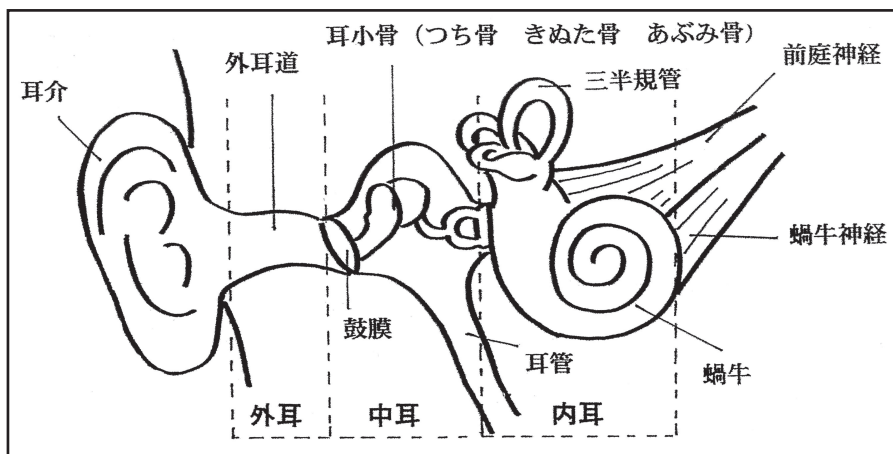


3. <解説> きこえにくい子どもたちについて知ろう

1) きこえにくさについて

①きこえの仕組み

下に図を示しましたが、音は左右の耳介から外耳道、鼓膜、耳小骨（つち骨・きぬた骨・あぶみ骨）と少しずつ増幅されて蝸牛に届き、そこから神経を通して脳に伝達されます。この道筋のどこかにダメージがあると音は脳に届きにくくなります。耳小骨までの間に音の伝達を妨げる要因がある場合を伝音難聴、蝸牛から後の部分に音の伝達を妨げる要因がある場合は感音難聴といいます。感音難聴の場合には音のきこえにくさとともに、音のひずみがでてきます。



②軽度・中等度難聴について

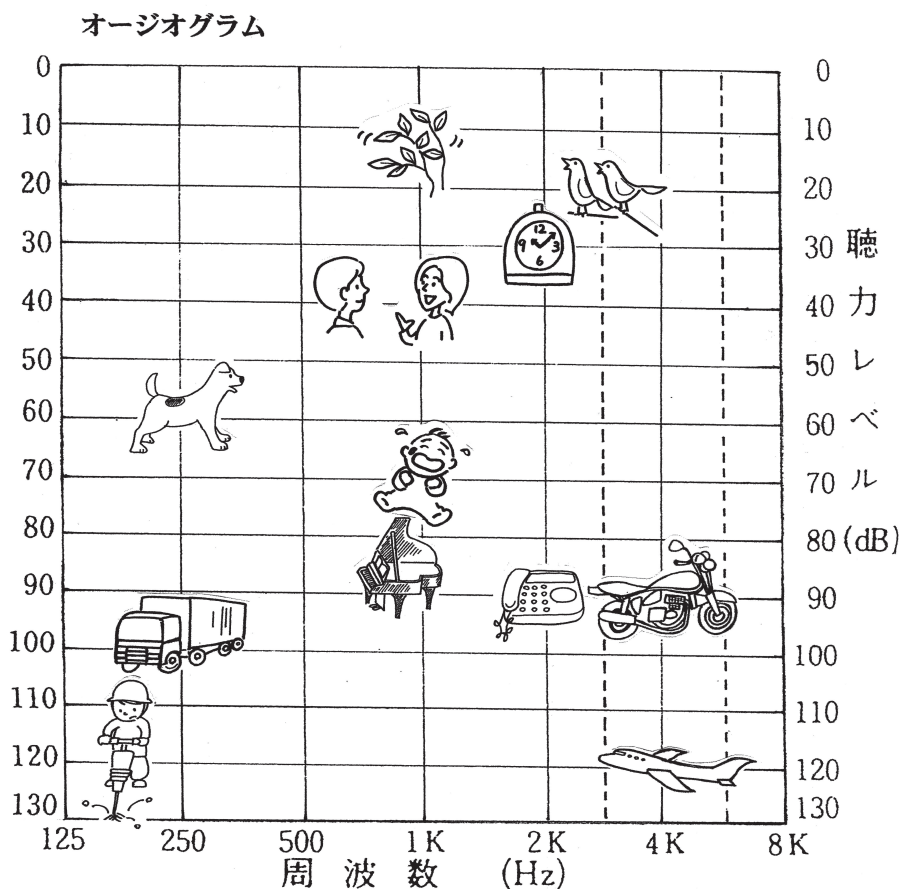
きこえにくさはその程度によっていくつかの段階に分けます。よく知られている分類として WHO のものがあげられます。

WHO の聴力分類

軽度	中等度	やや高度	高度	非常に高度
26dB~40dB	41dB~55dB	56dB~70dB	71dB~90dB	91dB~

身体障害者手帳の交付には 70dB 以上の聴力レベルが対象になりますし、小学校段階で教育の場を考える際には「おおむね 60dB」程度の聴力レベルが基準とされています。

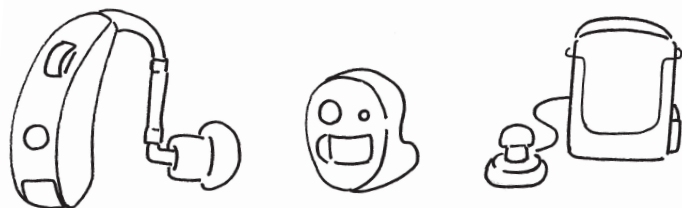
図1に聴力レベルとそれに対応する音のおおよその大きさを示しました。例えば、聴力レベル 70dB の場合には普通の声の大きさと会話する隣の人の声がほとんどききとれません。



2) 補聴器・人工内耳について

①補聴器について

きこえにくい子どもや大人に、音を大きくして耳に届ける機器が補聴器です。それだけですと耳を痛めてしまうこともあるので、大きな音は抑えるような機能もあります。技術の進歩で補聴器はより小さく、装用感の快適なものになってきています。今は耳掛け形や耳穴式の補聴器が中心です。



子どもが使っている補聴器のトラブルについては、以下の確認をしてみてください。分からないときには専門家（専門店）などに尋ねてください。

・ピーピーと音がる

- イヤモールドがしっかり耳にはまっていますか？
- ボリュームがいつの間にか大きくなっていませんか？
- チューブが外れていませんか？

・「きこえない」と子どもが訴える

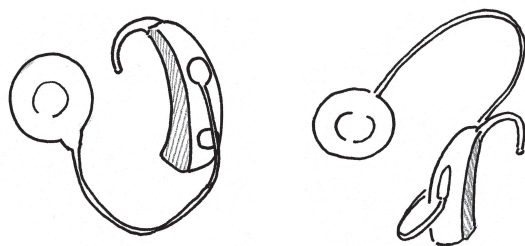
- 電池は入っていますか？
- 電池が切れていませんか？
- フックに水がたまっていますか？
- スイッチは入っていますか？

補聴器を購入すると取扱説明書もついていますので、子どもが使用している補聴器の扱いをあらかじめ学んでおきましょう

②人工内耳について

最近は人工内耳を装用している子どもも増えています。

人工内耳は、内耳の蝸牛に細い電極を植め込み、聴神経を電氣的に刺激して、それを脳に伝えて聴覚を取り戻すものです。マイクで音を拾い、スピーチプロセッサで音を電気信号にかえ、内耳に埋め込んだ電極に無線で信号を送ります。



人工内耳の音の調整は病院で行います。

人工内耳装用の際に注意することは以下のことです。

- ・磁気を利用した機械に対して、体内機器が反応することがあります（例えば、病院のMRIなど）。
- ・衝撃で壊れることがあります（例えば、スキューバダイビングやボクシングなど）。



3) 軽度・中等度難聴児のコミュニケーション

軽度・中等度難聴の子どもたちのほとんどは、きいて話すコミュニケーションを行っています。きこえないわけではなく話せないわけでもありません。それでもやはり健聴の子どもたちとちがうところがあると考えた方がよいでしょう。

一つは、きこえが不安定なことからくるコミュニケーションの不安定さです。十分きこえていると思っていたのに、いくつかの大切なことを聞き落としていたということがあります。集団でのコミュニケーションで、自分だけが聞き落としているということもあります。このようなことが続くと、きこえに頼るコミュニケーションが不安になってきます。

次に、他人と同じようで違うことからくる自己意識の形成にかかわる課題があることです。きこえにくい自分に気づかないまま対人関係のトラブルを繰り返す人もいます。きこえにくさに気づきつつも、周りによいモデルとなる人がおらず、どのような生き方をしたらよいのか分からない人もいます。

このようなことを解決するためには、自分自身を正しく理解することと、困難を克服する様々な手だてを知ることが大切になります。軽度・中等度難聴児を担当される先生は、子どもたちが自分自身を正しく理解し、困難を克服する様々な手だてを知るための指導や支援を行います。また、保護者の方々が、子どもを正しく理解し、子どもと安定したコミュニケーションをとるための助言者としても大切な役割を果たします。

4) きこえにくい子どもの教育

①聴覚障害児の教育

きこえにくい子どもたちの学ぶ場は大きく分けて二つあります。一つは特別支援学校で聴覚障害児教育の部門を設置しているところです。もう一つは小学校や中学校の中にある、聴覚障害児のための特別支援学級や通級指導教室です。これらの情報はそれぞれの自治体の教育委員会や特別支援教育センター等に尋ねると分かります。

②軽度・中等度難聴児の教育

軽度・中等度難聴児の教育については、地域の事情などによって様々だと言えます。聴覚特別支援学校で学ぶ軽度・中等度難聴児もいます。小・中学校にある聴覚障害児のための特別支援学級で学ぶ軽度・中等度難聴児や通級指導教室に通う軽度・中等度難聴児も、もちろんいます。また、健聴児と一緒に通常の学級で、特別なサポートを受けないで学ぶ軽度・中等度難聴児もいるのが現状です。そのほか、知的障害や肢体不自由の子どもたちが学ぶ学校にも、軽い聴覚障害を併せ有する子どもたちが少なからず見られます。

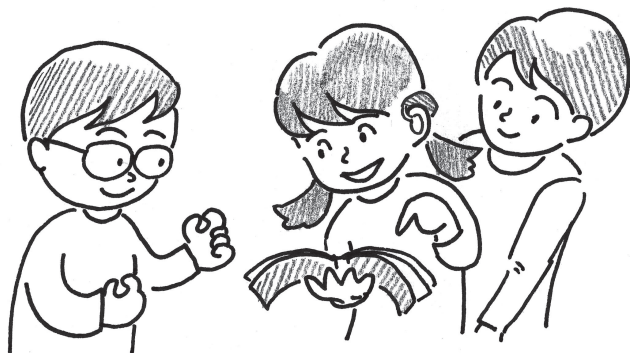
軽度・中等度難聴児の課題として、先にコミュニケーションの問題を挙げましたが、教育を担当する側が障害のあることやその程度を的確に理解することが難しいことも、この障害の大きな課題であるといえます。

その例として、人工内耳と一側性難聴について少し触れたいと思います。人工内耳の手術が成功すると、軽度・中等度難聴児と同じような聴力レベルになります。その意味では人工内耳の手術が成功したとしてもやはりきこえにくさについて本人や周りがしっかり理解していくことが大切になります。また、一側性難聴については、片側は正常のきこえなので大丈夫だと考えがちです。しかし不便さはあります。重要な場面で難聴耳の側の情報が入りにくくストレスを感じる人はいます。本人、保護者、そして係わる人々が、軽度・中等度難聴の課題を正しく理解することが何よりも必要とされます。

4. < Q&A> こんな時どうしよう

- Q1 教室がうるさくて、先生や友達の声がきこえないようなのですが？
- Q2 補助の先生や支援員さんにはどのようなことをお願いするとよいのでしょうか？
- Q3 子どもが「僕はきこえている。特別なことはなくていい。」というのですが、きこえていないことがあるようです。何もしなくてよいのでしょうか？
- Q4 きこえないことで自信をなくしているようですが、どのように対応したらよいのでしょうか？
- Q5 ことばの数が少なく学習内容も十分定着していないようなのですが？
- Q6 座席はどこがいいのでしょうか？
- Q7 難聴以外の障害や疾患を併せ有する児童を担当することになりました。どのような支援や配慮が必要でしょうか？
- Q8 屋外での活動の時にはどのような配慮が必要でしょうか？
- Q9 英語のリスニングはどうしたらよいのでしょうか？
- Q10 保護者が「この子はきこえているから大丈夫」というのですが、どのように説明したらよいのでしょうか？
- Q11 保護者がきこえるきょうだいに対して「お兄ちゃんは大変なのだから、あなたは我慢しなさい」といっています。きょうだいには同じような接し方をしてほしいと思うのですが、どのようにアドバイスしたらよいのでしょうか？
- Q12 お母さんが「お父さんやおじいちゃんが子どものきこえにくさを理解してくれない」と言います。どのようにしたらよいのでしょうか？
- Q13 子どもは通級指導で通ってきますが、小学校の在籍学級の担任がFM マイクを付けてくれません。よい方法はないのでしょうか？
- Q14 きこえにくいことが原因なのか、友達と約束事などでトラブルが時々あります。どのように対処したらよいのでしょうか？
- Q15 聾学校（聴覚特別支援学校）ですが、手話を使う子どもと話をしません。どうしたらよいのでしょうか？
- Q16 「きいている？」と尋ねると、「きいている。」と答えるのですが、内容は分かっていないことが多いです。私の尋ね方が良くないのでしょうか？

- Q17 名前や用語を間違っ覚えてることが多いような気がします。
どのように指導するとよいでしょうか？
- Q18 補聴器がうまく使えていないようです。誰と相談するとよいでしょうか？
- Q19 音楽、特に歌唱の時間をいやがります。どうすればよいでしょうか？
- Q20 体育やクラブ活動の時に注意することはありますか？



Q1 教室がうるさくて、先生や友達の声がきこえないようなのですが？

伝えたい声をきこえやすくしましょう。そのために以下の三つのことを心がけてください。

一つ目は、周りの雑音を抑えることです。

カーテンや床や壁の素材を工夫してみましょう。音が反響しにくくなります。防音ができる部屋を学習活動に使用することもよいでしょう。

二つ目は、補聴器が正しく使用されているか留意するとともに、席の位置や学習の形態を工夫することです。

学習の形態については、大勢で一度に話し合うようなかたちではなく、少人数で発言者が分かる学習のかたちも効果的です。クラスの仲間が、発言する人の意見を静かにきく習慣がついているといいですね。

三つ目は、声で伝えることを目でも見えるようすることです。

- ① 話すときには子どもが先生や友達の表情や口元を見ることができるよう場所や姿勢に気をつけましょう。
- ② 話す内容をまとめて黒板や紙に書いてみましょう。
- ③ 子どもや友達の様子によっては手話や指文字が効果的な手段になることもあります。



Q2 補助の先生や支援員さんにはどのようなことをお願いするとよいでしょうか？

難聴といってもそれぞれ聴力のレベルや本人の言語レベルによって、支援の仕方は変わります。まずは担任の先生と保護者でよく話し合い、今の子どものレベルに合った支援はどんなやり方なのかを検討してください。

例えば、小学校の高学年になると、補助の先生や支援員さんにノートテイク（先生や発言者の内容を紙に書いて伝える。）を行ってもらう方法があります。しかし、これには本人の読解力や学習意欲が関係してきます。本人に授業がもっと分かりたい、知りたいという気持ちが育っていない場合は、最初から横について全てを書き出しても理解できなかったり、集中が続かなかったりするのでせっかくの支援も活かされません。そんな時はまず担任の先生の授業を分かりたいという意欲をもてるような取組を考えましょう。補助の先生や支援員さんには全てをお世話してもらうのではなく、少し様子を見て、本人が集中していなかったり別のページを見ていたりしたときに注意してもらったり、分かっていない時にキーワードだけでも書いて伝えてもらうなど、臨機応変の対応が必要となります。

また、補助の先生や支援員さんに入ってもらう場合は、難聴児と支援者だけの関係になりがちです。分からないことを補助の先生や支援員さんにきいてくる場合もありますので通訳にならず、本人の力で担任の先生に質問や発言ができるよう支援していくことも大切です。

支援の方法で分からないことなどは、地域の聾学校や通級指導教室の先生に相談してみることもよいでしょう。

Q3 子どもが「僕はきこえている。特別なことはなくていい。」というのですが、きこえていないことがあるようです。何もしなくてよいのでしょうか？

本当に十分きこえていると思っている場合には、きこえない音があることと、どのようにしたらそれがきこえる（あるいは分かる）ようになるのかを理解できるように支援しましょう。

その子のオーディオグラムを示して、きこえの様子を丁寧に説明することで理解してもらえることがあるかもしれません。ささやき声で話しかけて、きこえにくいことを実感してもらうのも、有効な場合があります。

また、きこえないことは知っているのだが、自分が特別だと思われたくない場合には、次の二つのことを根気よく行ってみましょう。一つは話の内容を分かることがとても大切で楽しいこと、そしてそれは工夫と努力でできるようになるということを理解してもらうこと、もう一つは分かるために席を工夫したり補聴器を付けたりするのは、友達にとってもいずれ特別なことではなくなり、それぞれの子どもが自分らしく参加するための普通の手だてになることを理解してもらうことです。

上記いずれの場合でも、先生と子どもの間に基本的な信頼関係を築きながら係わることが大切です。

Q4 きこえないことで自信をなくしているようですが、どのように対応したらよいでしょうか？

きこえにくさをカバーするいろいろな方法を身につけることが大切です。補聴器を適切に調整する、視覚的な手段を工夫する、相手にはっきり話してもらうようお願いする等のことを、先生が子どもと話し合いながら一緒に試してみたいかがでしょうか。「こうすると良くきこえる」、「こうするとよく分かる」という体験が子どもの自信を取り戻させます。

また、社会に出て働いている聴覚障害者と会って話をきいたり、同じ年頃のきこえない仲間と一緒に活動することで、自信を取り戻すことも重要です。近年は休日の聾学校などを会場にして、地域にいる聴覚障害児を集めて、先輩の聴覚障害者の話をきいたり、一緒に勉強したり遊んだりする活動が各地で実践されています。仲間がいることを知ること、自分に合うロールモデルに出会うことなどは、自信を取り戻すきっかけになります。

このような仲間作りの活動が地域で見られない場合はどうしたらよいでしょうか。同じ聴覚障害児や聴覚障害成人について記述された新聞記事や雑誌・書籍の文章を紹介することも有効な方法の一つです。あるベテランの聾学校の先生は、聴覚障害者の役者、弁護士、生物学者など社会で活躍する先輩を子どもたちに紹介し、子どもたちがこれらの先輩に手紙を出し、返事をもらうという実践を行いました。返事をもらい励まされた子どもたちはとても感動していたとのことです。子どもたちが自分の将来について夢を持てるように指導・支援を考えていきましょう。

Q5 ことばの数が少なく学習内容も十分定着していないようなのですが？

聴覚障害児教育書に解説されている「聴覚障害児の言語指導法」のような専門的な技術を学ぶことも重要ですが、まずは次のことを考えてください。

①話の内容がはっきり伝わるように工夫をする。

子どもに話しかけるときには、相手をしっかり見て、話の内容を整理して、落ち着いて話しましょう。難聴の子どもたちは先生の口形や表情なども手がかりにして話を読み取っています。

②子どもが分かったかどうかを丁寧に確認する。

難聴の子どもを指導するときには、声や文字、更には指文字や手話なども使う場合があります。例えば手話で説明をしたときに、子どもは「分かった」と手話で答えたとします。でもその手話に対応する日本語は理解できたのでしょうか？また、先生が子どもに覚えてほしい用語を、話しながら黒板に書いたとします。子どもは「分かった」と言いました。このような時、子どもは文字が分かったのか、それとも読み方が分かったのかを確認してみましょう。

③子ども自身が「分からない」といえるように指導・支援する。

分からないときに「分からない」といえることはとても大切です。難聴の子どもの中には分からないことが当たり前になってしまい、分かったところをつなぎ合わせて自分なりの理解にしまう子どももいます。このような場合の理解したとする内容には、子ども自身が勝手に推測したことも含まれたりします。

分からないときに「分からない」といっても、先生が更に分からない説明を続けてしまったりすると、子どもはだんだん「分からない」と言わなくなるかもしれません。

子どもの理解の様子をよく見て、分かりやすい説明を心がけることで、子どもにとって「分かること」、「分からないこと」がはっきりしてきます。

そうすると、学習も進み始めるのではないのでしょうか。

Q6 座席はどこがいいのでしょうか？

難聴児が座る位置として、他の子どもの様子が見られることや、逆光で先生の顔の表情や話が見えにくくなることを避けるために、「窓側の左側で前から2～3番目の席がよい」と一般的には言われますが、子ども一人一人に合わせて決めることが大事です。

通常学級で、1年生の難聴児を担当されたあるベテランの先生は「入学してしばらくは一番前の真ん中の席に座ってもらいます。言われたとおりに教科書のページを開けているのか、ノートにどのように書いているのかなどを確認しやすい位置であり、すぐ目の前に行って声掛けをしやすいからです。」と話されました。難聴児の聴力だけではなく、その子どもの言語力や学習能力などを十分考慮して座席を決めていくのがよいでしょう。座席替えの時は事前に、どの位置に座ると先生の話が聞きやすい（読話しやすい）のかを子ども自身からきいておきましょう。



**Q7 難聴以外の障害や疾患を併せ有する児童を担当することになりました。
どのような支援や配慮が必要でしょうか？**

難聴以外の障害や疾患を併せ有する子どもは、聴覚特別支援学校（聾学校）以外にも特別支援学校、特別支援学級、通常学級等に多く在籍しています。難聴に関する（聴力、補聴器、コミュニケーション手段等）は、保護者や地域の聾学校のコーディネーター、幼児期に指導を受けていた専門家などから十分にアドバイスを受ける必要があります。併せ有する障害や疾患については保護者とよく話をして情報を得ることが必要です。肢体、情緒、知的面の状態を知り、早く子どもとコミュニケーションが取れるようにしましょう。

知的発達に遅れがあると、難聴の程度が軽度であっても話をきき取ることが苦手な子どもがいます。名前を呼ぶとすぐ振り向くからよくきき取れていると考えるのはまちがいです。まず単語だけでどのくらいきき取れるのか確認しましょう。ことばと同時に身振りサイン（手話、マカトンサイン等）を付けると理解できるのか、写真や絵カードなど視覚的な手掛りがあると分かるのかを把握する必要があります。

難聴を合併している症候群は多くありますが、ダウン症候群で難聴の子どもの数は比較的多いです。日本ダウン症協会の中にある＜難聴児者のグループ（青い船）＞では保護者などからの様々な相談に応じてくれます。

Q8 屋外での活動の時にはどのような配慮が必要でしょうか？

屋外の活動で時々起こるのが補聴器の破損や紛失です。補聴器や人工内耳はとても小さく、衝撃や事故（水没等）を当然のこととして作られてはいない精密機械です。そのため屋外の活動ではよりいっそうの注意が必要です。

補聴器の取り扱いについて、本人や保護者がしっかりとした習慣を付けることが大切です。そこで、以下のことがらについて先生と保護者、子どもで話し合い、以下の点について共通理解をした上で、指導・支援することが必要です。

- ・活動場所に関する事前の情報収集
- ・外すか外さないかの判断
- ・外した場合の収納方法や場所

このほかにも、補聴器の防水性やスポーツや遊びの中で補聴器が破損する可能性がないか、確認しておくこともあるでしょう。

もう一つは、情報が確実に伝わっているかどうかの確認を行うことです。屋外の活動では指示が十分伝わらないことで、難聴の子どもが周りの子どもの行動についていけなかったり、はぐれてしまったりすることもあります。音声で指示するだけでなく、携帯用のホワイトボードやタブレット PC などを使って視覚的に情報提示をしたり、指示の後にその内容を子どもたちに繰り返させたりするなどして、情報の漏れがないようにしましょう。



Q9 英語のリスニングはどうしたらよいでしょうか？

最近ではきこえない子どもの英語のテストで、リスニングの代わりに字幕のスクロールを使用するなど、本人の希望で方法を選択できるようになってきました。

きこえにくさがある子どもにとって、外国語の勉強は簡単ではありません。また、きこえ方にも個人差があります。まずは次のことを考えましょう。

- ・子どもの英語のリスニング力を把握する
- ・英語に対する興味や関心を高め、学習に対するモチベーションを維持する
- ・子どもの学習のペースやスタイルを尊重する

まず難聴の子どもがどの程度きこえていて、英語のリスニングがどの程度可能なのかを把握しておきましょう。はじめから「きこえない」と決めつけるのは間違いですし、「がんばればきこえるはずだ」と押しつけるのも間違いです。難聴の子どものきこえは様々です。その子のきこえの様子を正しく把握することが大切です。

次に、英語自体を好きになる工夫をしましょう。ALTの先生と英語や身振りで話す楽しさや外国の文化のおもしろさなどに気づくようにしましょう。

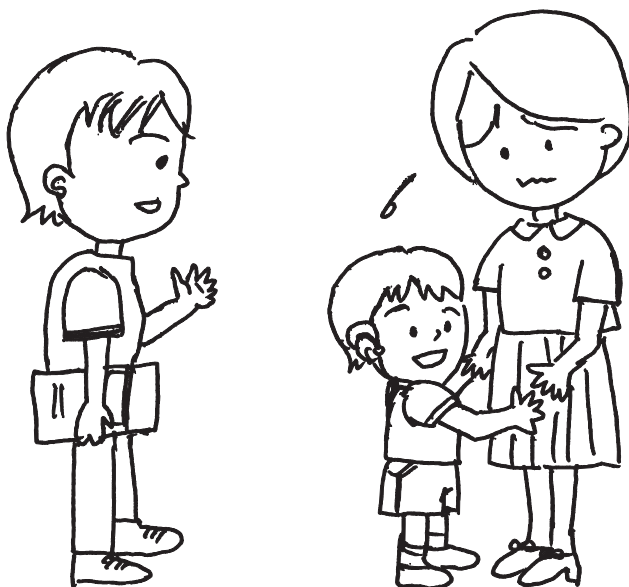
指導にあたっては、外国のろう者が用いる手話や指文字を取り入れてみるのもよいかもしれません。いずれにしても上手に話すことや上手にきくことが最大の目標になると、難聴児の学習は厳しさが増すことになります。

最後に、難聴児のペースを大切にしましょう。リスニングで健聴児と競うような場面などは子どもにとってマイナスの効果を示すこともあります。学習をとおして、子どもが自分のきこえの力をしっかり把握して、自分らしい学習の方法を見つけていけたらよいと思います。

**Q10 保護者が「この子はきこえているから大丈夫」というのですが、
どのように説明したらよいでしょうか？**

保護者には子どものきこえについて十分理解していない場合があります。このような場合、保護者の意識や理解の実態を把握した上で対応することが大切になります。

子どものきこえについて十分理解していない場合の具体的な例として、「きこえること」と「分かること」の違いを理解していない保護者について考えてみましょう。きこえることが当たり前の健聴者は、「きこえること」は即「その意味を理解する」ことだと思ってしまいます。しかし、難聴児には「音はきこえたが、意味のある言葉としては耳に届いていない」という状況が頻繁にあり、このことを保護者に説明する必要があります。難聴児のきこえの状況を理解してもらう方法として、難聴のシミュレーションテープを試聴してもらうことはどうでしょうか。小さな音で聞きにくい場面、大勢でがやがや話している場面、会話にノイズを付加した場面など、聞き取りにくい場面を経験してもらうのも有効な方法です。



Q11 保護者がきこえるきょうだいに対して「お兄ちゃんは大変なのだから、あなたは我慢しなさい」といっています。きょうだいには同じような接し方をしてほしいと思うのですが、どのようにアドバイスしたらよいでしょうか？

難聴児の親は他のきょうだいよりも難聴児に心理的にも、時間的にも手をかけがちです。小さい時から療育機関へ親子で通い、就学後も勉強のサポートなどで必死な様子は他のきょうだいたちもよく見えています。

しかし、他のきょうだいたちも親の愛情をたっぷり注いでほしいのです。自分を見て欲しいというアピールは当然出てきますので、そのサインを見逃さず、受け止めてあげるところと時間を作ることがよいのではないのでしょうか。例えば両親が休みの時は父親に難聴児を預け、母親は普段一緒にいられないきょうだいと秘密の時間を共有したり、少しの時間きょうだいとくすぐりっこをしながらスキンシップをするなどちょっとした工夫で精神的に安定してくることもあります。

逆にきこえないきょうだいやお父さん、お母さんは大変なのだから、自分はいい子でいなければならないという責任感を、ほかのきょうだいが過度に持っている場合もあります。難聴児を過保護にすることなく、親との時間やケンカなどの場面でも他のきょうだいに無理に我慢させず子どもらしいわがママを自由に表現できる関係づくりが大切です。そのためにもきょうだい全員が両親に受けとめられているという実感が必要です。

また、小さい時から療育機関や指導の場所に他のきょうだいも連れていく習慣ができていると、難聴児がどんなことをしながら言葉を獲得しているのかなども見て理解していきます。行事などに家族で積極的に参加することで、他の難聴児の家族とも触れ合うことができ、自分と同じ難聴児のきょうだいと友達になれることもあります。

Q12 お母さんが「お父さんやおじいちゃんが子どものきこえにくさを理解してくれない」と言います。どのようにしたらよいのでしょうか？

家族のいろいろな人が学校に来て、先生と話したり、子どもの様子を観察したりする機会を作っていきましょう。そのような機会に、きこえにくさを解説するビデオやDVDを利用して、それぞれのお子さんのきこえの様子を説明するのもよいでしょう。

学校によっては「お父さんの勉強会」のように、父親向けの研修会や交流会を開いているところもあります。父親同士、おじいちゃん同士など、立場の似たもの同士で話し合うことも意義のあることです。

また、きこえにくさの理解は聴覚障害について学ぶだけでできることではなく、実際にお子さんと遊んだり話し合ったり、一緒に作業をするなどの関係を通して可能になっていきます。家族の人に来てもらう際にはできるだけ一緒に何かをする場面を作ること大切だと思います。

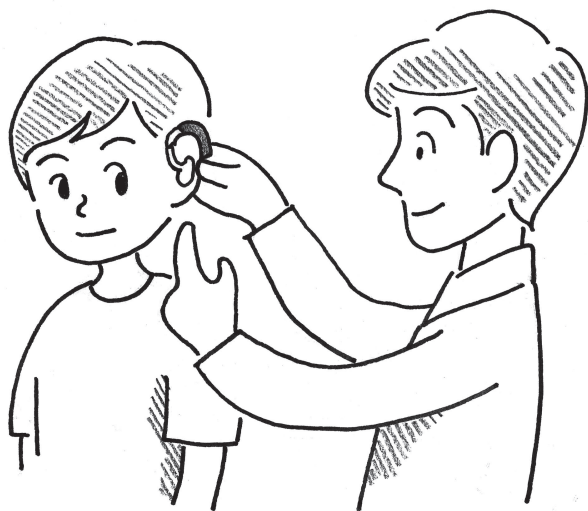


Q13 子どもは通級指導で通ってきますが、小学校の在籍学級の担任がFMマイクを付けてくれません。よい方法はないでしょうか？

先生がFMマイクを付けてくれない理由として、取り扱いが面倒であるとか、FMマイクの効果を実感されにくいといったことが挙げられます。FMマイクは難聴の子どもにとって、将来にわたって必要不可欠な機器にならない場合もありますが、特に、小学校段階では学習を支える重要な機器であることを伝えることが大切です。

先生が板書したり、難聴の子どもたちの後ろで話しかけたりする場面がよくありますが、このようなときFMマイクがあれば、子どもにとっては情報が入りやすく、また、先生にとっても指導しやすくなるなど、FMマイクのメリットを先生にお伝えして理解を求めることが大切です。

また、FMマイクの管理（電池切れへの対応やスイッチのON-OFF）は、子ども自身がすることを基本として、先生にはFMマイクを付けてもらうだけをお願いするなど、役割を明確にすることが長く使用してもらうことに繋がります。



**Q14 きこえにくいことが原因なのか、友達と約束事などでトラブルが時々あります。
どのように対処したらよいでしょうか？**

トラブルの原因を「きこえにくさから」と決めつけしないで、双方の言い分をよくきくことが大切です。きこえにくさが原因となっている場合には、きこえにくさへの意識に働きかける対処と併せて、きこえにくさに係わる具体的な問題を解決する対処が必要となるでしょう。

本人、周りの友達のきこえにくさの意識の問題は簡単には解決しません。障害理解・啓発授業やさまざまな活動を通して少しずつ理解を深めていくことになります。近年は聾学校や難聴学級・通級指導教室などの実践をまとめた資料もありますので、ここで紹介されている教材等を活用することもよいでしょう。

きこえにくさに係わる具体的な問題を解決する対処としては、普段からできるだけ騒音の中で友達の話进行きく状況を避けたり、子ども自らが友達の顔の表情や口元を見やすい位置どりをすることを心がけるなどが考えられます。

実際のトラブルの解決の場面では、トラブルを起こした両者にとって納得がいく解決法を見つけることと、それを二人の参加の下で実施してみ、理解してもらうことが大切です。そしてこのような解決法については子どもたちが係わる教師や保護者などにも知ってもらふことも重要です。

これらの活動をとおして、子どもたちが互いの関係でトラブルを起こしたときに、原因をあらためて考えてみる習慣が身に付けさせたいものです。

**Q15 聾学校（聴覚特別支援学校）ですが、手話を使う子どもと話をしません。
どうしたらよいのでしょうか？**

自己理解や人間関係の課題が考えられます。手話に対するその子の思い、手話とは関係なく相手との人間関係における思い（悩み）など、先生がその子とゆっくり話し合うことで見えてくるものがあると思います。手話を使うことがよいか悪いかではなく、その子がどんな自分になりたいのか、その子がどのような友達関係を作りたいのかを把握しながら、学校として、学級としてよりよいコミュニケーションや人間関係を築いていくことを考えましょう。

それまで小学校、中学校ときこえる子どもと一緒に勉強してきた軽度・中等度難聴児が、聾学校の高等部に転入してきた場合、小さな時から聾学校にいる生徒は手話で話すため、うまくその話の中に入っていけない、といった例もあります。

きこえない、きこえにくい自分と向き合うのには時間がかかる場合があります。また、友達や周りの人々の気持ちを理解し尊重しながら、自分のコミュニケーションのスタイルを作っていくにも、やはり時間がかかります。

先生は子どもたちの学習場面だけではなく、さまざまな人間関係や活動場面に触れながら、子どもの成長や変化に合わせて指導・支援を工夫していただきたいと思います。



Q16 「きいている?」と尋ねると、「きいている。」と答えるのですが、内容は分かっていることが多いです。私の尋ね方が良くないのでしょうか?

先生が尋ねているのは「音声が耳に届いている?」という意味でしょうか?それとも「先生の話の内容を理解している?」という意味でしょうか?あるいは「先生の話を書く努力をしている?」という意味もあるのでしょうか?きこえる子どもにとっては、これらの3つのことは同じかもしれませんが。先生の声に注意してきくと、その内容を理解できる子どもたちにとって、きくことは理解することになります。

しかし、きこえにくい子どもは、そうはいきません。音や音声はきこえるが、全部きこえているのか部分的にきこえているのか判断できないことがあります。きこえた音はある単語や文として理解できそうだが、間違いかもしれないと不安になることもあります。きこえていても意味が分かるわけではないし、「分からない」といっても先生は同じことばを繰り返すだけだから、適当に返事だけしておく。そんな気持ちがきこえにくい子どもの中にあるかも知れません。

このようなときは、「きこえている?」、「はい、きこえています」という会話で終わらず、その子にきこえたことばを繰り返してもらったり、文字で確認したりしてください。

Q17 名前や用語を間違っ覚えていて多いような気がします。どのように指導するとよいでしょうか？

きこえにくさがあると物の名前や学習や日常生活で使うことばを間違っ覚えることがあります。声で伝えるときに文字でも表してあげる方法があります。また文字ではっきり提示してからはっきりした言い方で伝えることもよいでしょう。

もう一つの可能性として、本当は正しく理解しているのだけれど、発音が間違っいたり曖昧であったりする場合があります。そのような場合は子どもの発音をきいた後、念のため書いてもらって、どのように理解しているのかを確認しましょう。発音が間違っている場合には、その場で直すこともありますが、学習の目的がことばの内容の理解であれば、その言葉は理解したものとして次へ進んでもよいかもしれません。

正しい言葉をきき取る機会が少ない場合には、正しい言葉を繰り返し書くことや、授業の中で意図的に使用させることなども、その言葉の定着に役立ちます。



Q18 補聴器がうまく使えていないようです。誰と相談するとよいでしょうか？

補聴器がうまく使えていない理由として、子どもが補聴器の機能について理解していないこと、補聴器を使用する習慣がついていないこと、補聴器を管理する習慣ができていないこと、補聴器を効果的に使おうとする意識や意欲が育っていないこと、補聴器使用に伴うトラブルとその解決法を十分経験していないことなど、様々なことが考えられます。

また、補聴器をうまく使うために子ども自身に学んでもらわないといけないこと、保護者や周りの人が協力しなければならないことなどがあります。小さな時には、お母さんをはじめとする家族の人々に、補聴器の管理をお願いすることになります。また、学校で係わる先生たちにも、「補聴器は大丈夫？」と声をかけてもらって、授業などの活動を始めることもあると思います。

補聴器がうまく使えていない時には、子どもへの指導だけではなく、周りの人々との協力が大切です。それ以前に、子どもが使っている補聴器について、先生自身が知っていることが大切ですので、時々先生も子どもの補聴器を試聴してください。

補聴器は万能ではありません。補聴器について先生が勉強を進めるとともに、補聴器を使用している子どもの悩みや課題を解決してあげてを考えていきましょう。

Q19 音楽、特に歌唱の時間をいやがります。どうすればよいでしょうか？

きこえにくい子どもの中には、音楽が好きな子どもがたくさんいます。成人難聴者の中にもカラオケが趣味の人が結構います。まずは先生が、「難聴の子どもは音楽が嫌い」と決めつけないことです。その一方で、きこえにくい子どもがきこえる子どもと同じように歌を歌うのはとても難しいことです。音程を外さずに歌うことは、きこえにくい子どもにとって困難な作業で、また音程の外れを指摘されるのも精神的にはつらい場面です。

楽しく歌うのは好きだけれど、厳しく評価されるのはつらいという子どもはたくさんいると思います。

リズムが得意な難聴児にリズムパートを任せるといった先生もいます。音楽の試験は、他の子どもと比較しないよう、別室で行うという先生もいました。

歌唱の正しさを評価することよりも、クラスの仲間と楽しい雰囲気と一緒に歌うことを優先してみてもいいかもしれません。



Q20 体育やクラブ活動の時に注意することはありますか？

補聴器や人工内耳は精密機器であり、たいたたりぶつかけたりすることを想定して作られてはいません。したがって体育やクラブ活動の内容にもよりますが、体に付けている機器に強い衝撃が加わる可能性がある場合にはあらかじめ外しておいた方がよいかもしれません。ただし、そのことで情報が入りにくくなるのは避けたいので、携帯できるコミュニケーションボードなどは用意した方がよいでしょう。

補聴器などの使用について、ベテランの先生は次のように述べてくれました。

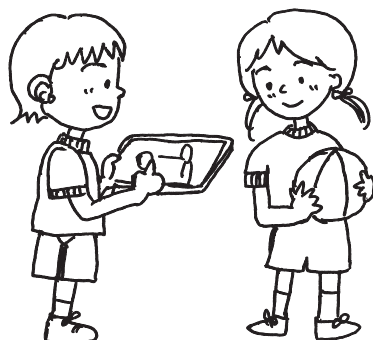
グラウンドや体育館での体育の時は、補聴器や人工内耳をつけて行っても差し支えないですが、水泳の時は外します。外したときは、補聴器や人工内耳をケースにしまい、担任又は、養護教諭に預けた方がよいでしょう。（預けることが難しい場合は、ケースにしまって、自分の机の引き出しにしまいます。）

水泳学習終了後は、耳の水をよく拭き、髪の毛が乾いてから補聴器や人工内耳を装用します。

サッカーの試合では、補聴器や人工内耳を外すように言われることがあると思いますが、外してしまうときこえが悪くなり、不安な気持ちにもなります。補聴器や人工内耳の上から、布性のヘアバンド等で固定すると安全に活動することができます。

機械の衝撃や事故に対する耐性は学校の担当者や補聴器・人工内耳メーカー等の専門家に確認しましょう。万一破損した場合の対応については、保険などの情報を十分収集した上で、学校と保護者などで話し合っておきましょう。

それから屋外での体育活動の場合には十分に情報が耳から伝わらないことがよくあるので、携帯用のホワイトボードやタブレット PC など、視覚的手段も目的に応じて使用してみるとよいかもしれません。



5. <関連情報> 困ったときに相談しましょう

国立特別支援教育総合研究所

<http://www.nise.go.jp/cms/>

ここでは特別支援教育に関する機関コンサルテーションや、海外の日本人学校で学ぶ障害のある子どもへの支援等を行っています。

特別支援教育センター

<http://www.nise.go.jp/zentokusen/index.html>

それぞれの地域にある特別支援教育センターが、障害のある子どもの教育について相談に応じてくれます。

聴覚障害者情報提供施設

<http://www.zencho.or.jp/>

聴覚に障害のある子どもたちも利用できる字幕付きビデオや手話付きビデオなどが各地のライブラリーにそろっています。

全国公立難聴言語障害学級連絡協議会

<http://www2.plala.or.jp/nangen/>

全国の難聴・言語障害学級（及び通級指導教室）の活動などについて情報が掲載されています。

6. <関連情報>もっと知りたいときに

軽度・中等度難聴に関する書籍

聴覚障害サポートハンドブック 軽度・中等度難聴編
きこえにくいお子さんのために・・・

全国早期支援研究協議会 編・発行 2007 年

小児の中等度難聴ハンドブック

加我君孝・内山勉・新正由紀子 編

金原出版株式会社 発行 2009 年

編集者一覧

後藤純子（兵庫県立こばと聴覚特別支援学校）

小高裕子（千葉市立菅田東小学校）

伊原素子（川崎市北部地域療育センター）

渡邊 恵（神奈川県聴覚障害者福祉センター）

小田侯朗 原田公人（国立特別支援教育総合研究所）

きこえにくい子どもたちのよりよい教育を いっしょにつくりましょう

国立特別支援教育総合研究所平成 23 年度専門研究 B
「軽度・中等度難聴児に対する指導と支援のあり方に関する研究」成果報告書 別冊資料
平成 24 年 3 月発行

研究代表者：原田公人 (harada@nise.go.jp)